

病害診断の現場から—ミョウガのいもち・紋枯—

診断依頼のあった事例を紹介します。今回は、いもち・紋枯ですが、宿主作物はミョウガです。



1. ミョウガ紋枯

病：8月20日に持ち込まれたミョウガ、診断依頼の主眼は花蕾の腐敗症状でした。はじめ直径1～2mmの小斑点が拡大して軟化腐敗していました。腐敗部分にはリゾクトニアの菌糸が見

られ、紋枯病と分かりました。また枯れ上がった下位葉鞘にも楕円形の斑紋が見られ、同じく紋枯病によることが分かりました。病原菌は *Rhizoctonia solani* ですが、イネとは菌糸融合群が異なります（イネ

AG-1、ミョウガ AG-2-2）。

2. ミョウガいもち病：この紋枯病被害株には葉枯れ症状も見られました。枯れ込みが葉先からであることから（左）当初、紋枯病によって水分供給が阻害されたことによる葉先枯れと思われましたが、枯れ込みの中央に斑点が見られる（中）ことから、斑点部分にセロテープを押し当ててプレパラートを作成して観察したところ、ミョウガいもち病菌（*Pyricularia zingiberis*）の分生子が多数形成されているところが観察されました。

